

持続泳における感性用語の出現について

～動感身体知の言語化を問う～

大山 康彦・椿本 昇三*・鋤柄 純忠・齋藤まゆみ*

キーワード：大学生 10分間泳距離測定 運動直後のコメント 感性用語 動感身体知

I. はじめに

身体運動が身体文化・運動文化の習得や運動能力あるいは体力の向上といった、主に発達の論理によって理解されてきた側面はあるが、近年においては運動が持つ経験の多様な意味を取り出して評価するという人間学的なアプローチが、結果としてもたらされる発達に回収することのできない、運動のプロセスにおいてもたらされる豊かな経験を、現象学的な記述を通して明らかにしようとする試み⁶⁾ がなされている。

運動学習場面において「ことば」を記号として動作表現する手法は、極めて大切なことである。特に運動習得に必要な用語の獲得および指導用語の理解は、運動の習得過程をスムーズにしていくこと、すなわち運動の理解は用語の理解とも相関することが明らかにされている^{2),3)}。

このことは金子⁵⁾ が指摘している、本原的な私の身体性において、「私が動くことができる」という動感身体知をめぐる新たな体育的意義と独自の教育契機を生徒に供給できることと深く関わっている部分であり、人間学的な基礎づけを基柢に据えた新しい身体性の認識としての動感身体知の形態発生を分析し、認識しておく必要に迫られている。

身体知の言語化の複雑性について岡端⁴⁾ は、身体の使い方に関して二種類の知識を考慮しなければならないことを指摘している。すなわち、運動意識の中で対象化されたものに関する知識、つまり運動の仕方に関して対象化された知識と、もう一方、暗黙知の次元に潜んでいる対象としてとらえることのできない身体化された知識である。そして、運動ができるためには、運動の仕方に関して対象化された知識を捉える以前に、実施者自身の身体に運動の感じを生じさせてくれるような心身状態のあり方をそのベースとして前もって獲得しておくことが前提とされなければならないとし、言語化の複雑さを解説している。

大学体育における人間教育への取り組み⁶⁾ が模索されているが、「やってみること」と「やったことを言葉にすること」、「やったことの『理』を知ること」の重要性が認識され、「自然の一部でしかない意識の表面には出てこない身体」(養老孟司)を自分の「からだ」としてみずからのもとに取り戻し、身体を言葉にし、行動にしてゆくような方策が新たな視点として問われている。

*筑波大学体育科学系

ある運動技能習得に伴う学習者の内省報告を継続的に記録することにより、学習者の運動イメージの把握や理論知および経験知のレベルを知ることによって客観的分析を進めることが可能になることを根拠に、筆者らは基礎的水泳運動能力の解発と同時に「やったことを言葉にする」ことに力点を置き、特に水泳授業において継続的に取り組み、持続泳能力を測る「10分間泳測定」¹⁾を題材として分析を試みた。当初書かれた学生の記録からは、記述量が極めて少ないことと、記述内容が一様に短絡的なしかも感情的表現に終始する傾向が強く、驚くほど「言葉」を持っていないことに気づかされ、言語能力や内省能力の発達が未熟であることや、改めて運動体験を言語化することの困難性に気付かされた。

文部科学省においては、今年改訂された小学校学習指導要領¹⁾(2008)の総則で、「各教科の指導に当たっては、児童の思考力、判断力、表現力等をはぐくむ観点から、基礎的・基本的な知識及び技能の活用を重視するとともに、言語に対する関心や理解を深め、言語に関する能力の育成を図る上で必要な言語環境を整え、児童の言語活動を充実すること。」と述べている。この観点からも体育における言語環境を整えるための基礎的な研究を行うことは、今後の体育授業の発展に貢献できると期待されている。

これらの観点から検討を重ね、運動直後のコメントの記述方法について、改めて心理的・技術的・体力的要因の3要因に分けて気付きや感想を書くことに留意させた。

本研究は、大学生の水泳運動能力獲得に関わる運動体験をとおして、どのような感性用語を用いているかを明らかにすることにより、動感身体知の形成に関わる基礎資料を得ることにある。

Ⅱ. 方法

1. 水泳授業および「10分間泳測定」の概要

1) 授業概要

- ・ 公共施設プール(市営)を利用しての実施。
- ・ 2期に分けての実施。1期は9月に5回(屋外プール)、2期は12月に3回(屋内プール)の計8回。
- ・ 1回当たりの時間数は約2時間。
- ・ 1期と2期の間の約3ヶ月間に、「小グループ別練習」(4~5人)を課題とする最低3回以上の練習を課す。小グループ編成に当たっては、メンバー間で水泳運動能力が異なるように配慮し、異質グループ内での自己課題解決能力をより高めることを意図している。

2) 測定期日

「10分間泳測定」は1期の最終日(9月)と2期の最終日(12月)の2回実施。

3) 計測方法

- ・ 2~3人一組で交互に泳距離の測定に当たらせ、泳距離測定の実行ミスを最小限にするために、50m毎の経過時間とラップタイム、および5分経過時の測定などを記した記録用紙でチェックさせた。
- ・ それと同時に50m毎の泳法ならびに立ち回数のチェックも行った。
- ・ 心拍数の測定については、開始前と運動直後の2回行い、10秒間の心拍数を触診法に

より計測させた。

- ・「運動直後のコメント」として、感想や気付きを心理的・技術的・体力的要因について整理して書くことを指示した。なお、この3要因で分類する方法は、文部科学省の平成17年度学校体育中央講習会⁹⁾で椿本等が提唱している内容を引用した。

2. 対象

1997～2003年までの児童教育専攻学生2年次生の計543名（男子：140人，女子：403人）。

3. 用語の抽出および統計処理について

書かれた文章から、主に心理的・技術的・体力的要因に関係すると思われる用語を全て3要因に分類しながらの抽出を行った。さらに同義語および同類語と判断できる用語は同類項としてまとめた。結果や予測・推量および願望など微妙な言い回しについても、できるだけ忠実に捉える配慮をした。

その結果、心理的要因：21項目，技術的要因：23項目，体力的要因：7項目についての感性用語を分類できた。

Ⅲ. 結果

1. 対象とした大学生の水泳運動能力の実態について

「10分間泳測定」結果からは、以下のような考察¹⁾を既に得ている。

- 1) 10分間泳測定における泳距離の平均値は男子で約380m，女子で約350mであった。400m以上を中級者レベルと評価する指標からは、大学生男子では初中級，女子については初級レベルの者が多いといえることができる。
- 2) 10分間泳測定における泳距離の増加は、男女ともに2回目測定時に有意差が認められ、男子で平均44.92m，女子で46.58mの増加がみられた。また中途での立ち回数も男女ともに半減した。集中型授業における授業成果としての大学生の泳力向上の可能性を支持できる結果と言える。しかしながら、1980年代測定時のデータ62.26mと比較するならば増加率の低下が明らかであった。
- 3) 泳力の男女差については、男子が優位であり泳距離の比較では約35mの差であったが、これまでに得られていたデータ50mとの比較からは、性差間能力の差が縮小化する傾向が見られる。
- 4) 持続泳中に用いる泳法は能力の上位群ほどクロールで泳ぎ、下位群では平泳ぎを多用する傾向が見られた。男女の比較からは男子にクロールで泳ぐ割合が高いのに対して、女子については平泳ぎに偏った泳ぎ方をしているのが特徴的であった。
測定開始50mまでは能力差，男女間とを問わず，全体がクロールで泳ぎ始めるが，100m以降は特徴的な変化が確認できた。特にクロールでの呼吸法の習得程度が大きく反映された結果であると推論できよう。
- 5) 10分間泳測定は，集中型授業においても水泳運動能力を測定する有効な方法であると考えられ，泳力向上の具体性が得られる可能性を示している。

2. 感性用語の抽出結果と分類 (表1～表3)

1) 心理的要因について

- ・ 1回目(9月時)で記述内容の高かった項目は、男子で「疲れた」(26.86%), 女子では「苦しい・苦しかった・きつかった・」(34.24%)であり、いずれもnegative要因に関わるものであった。
- ・ 2回目(12月時)における記述内容で最も高かった項目は、男女とも「うれしかった・楽しかった・よかった」(男子:35.0%, 女子:50.62%)のpositive要因であった。
- ・ 記述率10%を超える項目に着目するならば、男女ともに2回目測定時にpositive要因の「自信になった・よい経験になった・感動した・」, 「気持ちよく泳げた・リラックスして泳げた・楽に泳げた」および「疲れなかった・苦しくなかった・バテなかった」の3項目について高く、1回目測定時との比較からは大きな変化と捉えることができよう。

表1 10分間泳測定における記述用語の出現(心理的要因):1997~2003

具体的に記述された用語 (positive要因)	記述回数 (%)			
	M (n:140)		F (n:403)	
	9月時	12月時	9月時	12月時
1. がんばった・努力した	1(0.71)	13(9.29) ↑	11(2.73)	49(12.16) ↑
2. 努力したい・頑張りたい・練習したい・挑戦したい	23(16.43)	10(7.14) ↓	134(33.25)	18(4.47) ↓
3. うれしかった・楽しかった・よかった	8(5.71)	49(35.00) ↑	23(5.71)	204(50.62) ↑
4. 自信になった・よい経験になった・感動した・驚いた	3(2.14)	27(19.28) ↑	21(5.21)	132(32.75) ↑
5. 気持ちよく泳げた・リラックスして泳げた・楽に泳げた	10(7.14)	17(12.14) ↑	30(7.44)	80(19.85) ↑
6. 悔しい・悔しかった	4(2.86)	12(8.57)	18(4.47)	21(5.21)
7. もう少し頑張れた・もう少し泳げた	3(2.14)	14(10.00) ↑	10(2.48)	55(13.65) ↑
8. 楽に泳ぎたい・リラックスして泳ぎたい	1(0.71)	0	0	5(1.24)
9. 疲れなかった・苦しくなかった・バテなかった	0	13(9.29) ↑	0	82(20.35) ↑
10. 立たないようにした・立たないようにしたい	4(2.86)	1(0.71)	25(6.20)	5(1.24)
11. 10分間は短く感じた・早く感じた	2(1.43)	1(0.71)	9(2.23)	10(2.48)
12. 余裕があった	0	4(2.86)	0	0
13. 成果が出た	0	0	0	44(10.92) ↑
(negative要因)				
1. 疲れた	39(27.86)	9(6.43) ↓	124(30.77)	20(4.96) ↓
2. 苦しい・苦しかった・きつかった・つらかった	35(25.00)	4(2.86) ↓	138(34.24)	39(9.68) ↓
3. 不安・心配・自信がない・あせり	3(2.14)	3(2.14)	21(5.21)	5(1.24)
4. 残念だった・がっかりした・情けない・あきらめた	7(5.00)	18(12.86) ↑	20(4.96)	46(11.41) ↑
5. 長く感じた	11(7.86)	0	37(9.18)	4(0.99) ↓
6. 手足が重い・腕が痛い・気分が悪い	0	1(0.71)	11(2.73)	3(0.74)
7. 消極的だった・力を抜いた	0	2(1.43)	0	2(0.49)
8. 到達できなかった	0	0	0	2(0.49)
Total	154(110.0)	198(141.4)	632(156.8)	826(204.9)

- ・ 1回目測定時で比較的高かった「努力したい・頑張りたい・練習したい・挑戦したい」(男子:16.43%, 女子:33.25%)の項目については, 2回目測定時においては, 男子:7.14%, 女子:4.47%と大幅に減少している。
- ・ 全体的な記述量については, 男子よりも女子の方が高く, 2回目測定時では, 男子141.4%に対し, 女子204.9%であった。

2) 技術的要因について

- ・ 1回目の記述内容で最も高かった項目は, 男子では「フォームが崩れる・ストリームライン, グライドがとれない」:20.0%, 女子では「呼吸ができない・呼吸が続かない…」:21.59%であり, 次いで, 「立ち回数が多い・すぐに立ってしまう」が男子14.28%, 女子15.38%と, いずれも技術的未習熟に関わる項目であった。
- ・ 2回目の記述内容で最も高かった項目は, 男女ともに「長く泳げた・距離が伸びた」:男子48.57%, 女子52.60%であり, 次いで「立たずに泳げた・泳ぎ続けられた」:男

表2 10分間泳測定における記述用語の出現(技術的要因):1997~2003

具体的に記述された用語 (positive要因)	記述回数 (%)			
	M (n:140)		F (n:403)	
	9月時	12月時	9月時	12月時
1. リズムよく泳げた・同じペースで泳げた	3(2.14)	15(10.71) ↑	14(3.47)	41(10.17) ↑
2. 同じペースで泳ぎたい・一定のリズムで泳ぎたい	18(12.86)	2(1.43) ↓	25(6.20)	10(2.48) ↓
3. 立たずに泳げた・泳ぎ続けられた	1(0.71)	17(12.14) ↑	13(3.22)	51(12.65) ↑
4. ゆっくりと・長く・楽に・効率よく泳ぐ	0	3(2.14)	27(6.70)	5(1.24)
5. クロールで泳ぎ続けたい・クロールを直したい	2(1.43)	3(2.14)	15(3.72)	7(1.74)
6. 平泳ぎを覚えたい・平泳ぎで挑戦したい	2(1.43)	0	5(1.24)	0
7. 呼吸を整えて・呼吸法を身につけたい・上手な呼吸で	4(2.85)	3(2.14)	15(3.72)	37(9.18) ↑
8. フォームに気をつけて泳ぐ・ストリームライン・グライド	2(1.43)	11(7.86) ↑	20(4.96)	29(7.19) ↑
9. ターンができるように・ターンの練習を	1(0.71)	0	7(1.74)	0
10. 基本、基礎が大切だ	1(0.71)	0	3(0.74)	4(0.99)
11. 長く泳げた・距離が伸びた	0	68(48.57) ↑	0	212(52.60) ↑
12. 上達した・うまくなった・成果があった	0	18(12.86) ↑	0	0
13. クロールで泳げた・泳ぎ続けられた	0	5(3.57)	0	19(4.71)
14. 平泳ぎができるようになった	1(0.71)	3(2.14)	0	11(2.73)
15. 立ち回数が少なかった・減った	0	18(12.86) ↑	0	59(14.64) ↑
16. フォームが改善された・上達した	0	0	0	14(3.47)
17. 水に慣れた・水と一体になった・水の抵抗を感じた	0	0	0	6(1.49)
(negative要因)				
1. 立ち回数が多い・すぐに立ってしまう	20(14.28)	11(7.86) ↓	62(15.38)	17(4.22) ↓
2. 呼吸ができない・息が続かない・呼吸法が…	15(10.71)	2(1.43) ↓	87(21.59)	9(2.23) ↓
3. フォームがくずれる・ストリームライン, グライドがとれない	28(20.0)	1(0.71) ↓	46(11.41)	6(1.49) ↓
4. あまり進めない・体が沈む・距離が伸びない	8(5.71)	10(7.14)	22(5.46)	46(11.41) ↑
5. ペース配分ができない・ペースがわからない	9(6.43)	2(1.43) ↓	16(3.97)	5(1.24)
6. 平泳ぎができなかった	0	1(0.71)	6(1.49)	0
Total	115(82.1)	193(137.8)	383(95.0)	588(145.9)

表3 10分間泳測定における記述用語の出現（体力的要因）：1997～2003

具体的に記述された用語 (positive要因)	M (n: 140)		F (n: 403)	
	9月時	12月時	9月時	12月時
1. 持久力をつけたい・長い距離を泳ぎたい	8(5.71)	0 ↓	15(3.72)	0 ↓
2. 体力をつけたい・体力づくり	6(4.28)	2(1.43) ↓	18(4.46)	4(0.99) ↓
3. 体力が向上した・体力を維持できた	0	6(4.28) ↑	0	13(3.22) ↑
4. 余力があった	0	1(0.71)	0	5(1.24)
(negative要因)				
1. 体力がない・運動不足・スタミナ不足	31(22.14)	5(3.57) ↓	53(13.15)	11(2.73) ↓
2. 休んでしまった・休む時間が長かった	3(2.14)	0	6(1.49)	1(0.25)
3. バテた・スタミナが切れた	0	2(1.43)	0	0
	48(34.3)	16(11.4)	92(22.8)	34(8.4)

表4 水泳指導場面における技術用語一覧表と抽出された用語について
(網掛けされた項目は、抽出された用語を示す。)

1	浮力	24	スカーリング	47	キーホール・プルパターン
2	抵抗	25	スナップ	48	平泳ぎ
3	水圧	26	ドル平	49	ウェッジ・キック
4	揚力	27	浮標	50	ウィップ・キック
5	抗力	28	伏し浮き	51	馬泳ぎ
6	アルキメデスの原理	29	背浮き	52	ロング・アーム・プル
7	バディー・システム	30	クロール	53	あおり足
8	沈む	31	エルボー・ベント	54	足首を返す
9	浮く	32	ハイ・エルボー	55	背泳ぎ
10	ストリーム・ライン	33	キャッチ・アップ	56	横泳ぎ
11	キック	34	ローリング	57	バサロ・キック
12	蹴伸び	35	ストローク	58	はさみ足
13	グライド	36	エントリー	59	踏み足
14	バタ足	37	キャッチ	60	蹴り足
15	カエル足	38	プル	61	横体姿勢
16	呼吸	39	リカバリー	62	古式泳法「水府流」
17	ポビング	40	ギア・チェンジ	63	ターン
18	ブクブク・パー法	41	リズム、リズムカル	64	有酸素運動
19	ウン・パー法	42	アクセントをつける	65	見取り稽古
20	イルカとび	43	コンビネーション	66	他者観察
21	ドルフィン・キック	44	タイミング	67	グループ学習
22	サイン・カーブ	45	バタフライ	68	補助・幫助
23	エレメンタリー・ストローク	46	伸びをとる		

子12.14%，女子12.65%であった。

- ・10%を越す記述率は1回目よりは2回目の方が高く，positive要因にその傾向がみられた。
- ・記述量および記述内容については，男女ともに近似した傾向を示している。

3) 体力的要因について

- ・男女ともに1回目測定時において，negative要因の「体力がない・運動不足・スタミナ不足」（男子：22.14%，女子：13.15%）についてのみ記述回数が高かった。
- ・2回目測定時の記述量は，1回目に比して極端に減少しており，男女ともに似た傾向を示している。
- ・他の2要因に比較して，本要因の計7項目は，約1/3程度の記述量でしかなかった。

3. 水泳指導用語に関する抽出された技術的用語

水泳指導場面において，指導者から発せられる水泳特有の技術的用語について，どの程度の用語を獲得し記述しているかを表したものが表4である。

68項目中，抽出された用語は「抵抗」・「ストリームライン」・「グライド」・「呼吸」・「クロール」・「平泳ぎ」・「ターン」の7項目であり，全項目の10.29%の出現率であった。

IV. 考 察

1. 運動体験の言語化と感性用語について

対象となった大学生の水泳運動能力は，大半が初中級レベルであったことも背景にあり，水泳授業における学習効果としての泳力（持続泳能力）向上については男女ともに有意差が明確に認められる結果¹⁾を得ている。

感性用語の記述傾向からは，男女ともに2回目測定時の記述量は心理的要因が最も高く，技術的要因を上回った。また技術的要因に関する記述内容からは，指導場面で用いられている用語をフィードバックさせた内容は極めて少なく，水中での微妙な身体操作などの感覚的要素や水のもつ特性の影響など具体的な記述はほとんど見受けられなかった。つまり，運動意識のなかで対象化された，運動者の反省的意識によって捉えられた記述内容が大半を占めており，対象として捉えることのできない身体化された知識や感覚など，有用性から離脱しての溶解体験をとらえようとした表現はほとんどみられなかった。このことは獲得している水泳運動能力が未習熟であることによる影響が大きいことが考えられる。一方，性差の観点からは，心理的および技術的要因の2要因について女子の記述量が男子よりも多い傾向が見受けられた。

泳距離が有意に向上したことは，すでに統計的に確認されているが，心理的要因の記述変容からは，negative要因としての「疲れた」・「苦しい，きつかった，つらかった…」の2項目についての記述量が2回目において激減していること，それに代わって，「うれしかった，楽しかった…」・「自信になった，よい経験になった，感動した…」，さらに技術的要因の「立ち回数が多い，すぐ立ってしまう」・「呼吸ができない，息が続かない…」および「フォームくずれる，ストリームライン・グライドがとれない」のnegative要因3項目について記述量が減少していること，そして「長く泳げた，距離が伸びた」についての

記述量が最も高かった，ことなどから泳力の向上を心理的および技術的側面からも十分に確認することができる。

一方，体力的要因に関する記述量は，他の2要因に比して極端に少なく，僅かに1回目測定時における「体力がない，運動不足，スタミナ不足」についての記述量が認められるだけで，2回目測定については1回目よりも大幅な記述量の減少がみられた。性差の観点からは，「体力がない，運動不足，スタミナ不足」についての記述量は，1回目測定において女子よりも男子の方が高かった。

「10分間泳測定」に求められる身体的要素としての体力要因は，心肺持久力・筋持久力および全身持久性，および呼吸器官としての「呼気」・「吸気」など呼吸法との関連性が主要なものとして問われてくるが，記述されたほとんどが「体力」や「持久力」および「運動不足」といった日常的な一般的用語にしかみられず，体力に関する具体的内容までは言い表されていない。このことから，自身の身体観や体力に関わる認識および体力構成要因の理解が十分に形成されていないことが推測できよう。今後は，体力に関する用語の分類をより詳細にすることで，体育の教科としての特徴である体力についての知識を理解させることができる可能性を示唆している。

2. 運動経験による記述のカテゴリー化への試み

運動の経験は，本来的に主観的，個人的なものであり，その経験によってもたらされる意味や意義を見出すための方法も，必然的に「経験的」なものにならざるを得ない。運動の経験は，それを行う人間自身の目的意識に基づいた固有な特徴を持っており，その経験は，意識に表れるがままの経験の直接的記述と，そこから取り出された意味を解釈する現象学的方法によって記述されることになる。

運動の経験⁷⁾は，本質的に非言語的，非知的な活動であるが，我々がスポーツや運動について語るとき，経験的記述は運動の経験の本質的特徴を捉えるのにより近いものであると言えよう。また，経験的記述は，運動中および運動直後における運動者の主観的表現の言語的解釈ともみなすことができる。

運動の経験が自分自身の運動経験の間および経験直後にどのような意味を獲得するのかということを理解するために役立つものであり，同時に自分自身を知るための方法を示すものとの考えから，井上⁸⁾は経験的記述に対する択一的なカテゴリーの枠組み形成を試みている。すなわち，1) 空間・時間認識，2) 他者認識，3) 身体・自己認識，4) 他者一体化，5) 身体超越，6) 美的感覚，7) 決断，8) 人間学的意味，9) 自己確認，10) 可能性探究である。これらは相互に関連し，本来分離することはできないものであるが，カテゴリーは，運動者の生々しい経験に関する一定の特徴を示しているとし，各カテゴリーを次のように解釈している。

〔1) 空間・時間認識⁸⁾

運動者の生きられる経験における時間と空間の認識について言及する。記述において，運動者は自身の運動に内在する空間的，時間的特質を生き生きと表現する。際限のない空間や瞬間瞬間の経験を感じ取り<知る>ための特定の「方法」が運動者によって確認される。

2) 他者認識

運動者は、経験の環境内における他者について認識する。パフォーマンスの間、他者（チームメイト、相手、審判、コーチ、観客、道具、施設等）は、普段とは全く別の角度から認識される。これらの「他者」も、運動考にとって生きて動いているまゝの存在である。

3) 身体・自己認識

運動経験中の身体の運動を詳細に写し出す。運動考の内的態度、あるいは身体的な気づきが、運動から運動への経験において生き生きと記述される。それはあたかも自己の身体がそれぞれの状況において、自分自身に話しかけているかのようである。

4) 他者一体化

運動を経験中、運動考が他者と統合される状態を描いている。運動者は生きられる運動において、他者、特に他の運動者やそこに含まれる道具との一体感を持つようになる。運動考は、新しい世界との出会いを通して、自身が全体の一部であることを感じる。それは生きられる経験における自身と他者との間の特別な相互作用である。

5) 身体超越

運動者はある特定の行為に没頭する時、自分自身の身体を「忘れ」、あるいは自己の喪失態を経験する。それは運動者が、動くという行為に熱中し、身体を感じることをすら失ってしまう状態である。運動の経験は、この時多くの努力を必要としない。そして、無意識的、無意図的に一定の身体的技術を獲得する。

6) 美的感覚

運動考によってのみ経験される、身体感覚的な理解を表わす。それは、身体的技術の獲得と深く関わると共に、運動考の内的成長や発達の身体的感覚あるいは美的感情を伴っている。

7) 決断

運動考の予期、集中、あるいは運動経験における特定の行為に対する決断を示す。スポーツを経験するとき、運動者は択一的な決断を要求される状況にしばしば遭遇する。それは運動考によって、状況に対する注意と意図、それに対する即座の判断や解釈、そして予期される行為への準備として表現される。

8) 人間学的意味

喜び、絶望、自由の純粹な表現、あるいはスポーツの経験を通して「特に自分自身のもの」を得た感覚である。結果として、ここでは意識レベルでの肯定的、あるいは否定的自己との遭遇をもたらす。運動考は、その経験を通して自身の世界内存在を感じとる。

9) 自己確認

スポーツの経験を通して自己を理解すること、あるいは自己を確認することを示す。その経験を通して、運動考は自分自身の世界内存在を確認する。運動考は、運動経験の意味や意義を見い出す中で自分自身を理解する。またそれは、個別的な成長や発達と関わっている。

10) 可能性探求

運動者の行為に内在する潜在的な能力の追及、すなわちスポーツ経験の間やその直後の可能性の探究を示す。それは、次の運動経験へ向けての創造性と動機づけの表現ともみなされる。言い換えれば、それは運動経験と関わる自己の世界の拡大であり、個別的な成長や発達と関わっている。」

表5は、井上⁸⁾の提示した主要なカテゴリーを基準に、記述された用語について分類化を表したものである。その結果、2) 他者認識および4) 他者一体化の2項目を除く、8のカテゴリーについて識別できた。

特に、心理的要因に関しては「人間学的意味」についての記述項目が多く、技術的要因に関しては、「身体・自己認識」や「決断」および「自己確認」の3項目に多く、体力的要因に関しては、「自己確認」について多くの記述がなされている傾向が把握できる。

それに比較して、1)「空間・時間認識」や5)「身体超越」および10)「可能性追求」の4項目についての記述は極めて少なかった。

8のカテゴリーと3要因との関係において、ある要素への偏重した傾向は確認できるが、全体的には、身体および運動が幅広い可能性を有していることに気付かせる。

ただし、「人間学的意味」「自己確認」「可能性探求」の3つの段階における特質は、個別的な発達に関わって、運動経験の教育的な意義を反映するものと井上は指摘していることなどから、「10分間泳測定」を運動経験とした今回の記述内容の分析からは、「人間学的意味」および「自己確認」の2項目については該当する記述項目は散見されるが、「可能性追求」に関しては全体で3項目に過ぎず、潜在的能力の追求に関しては、やや消極的態度であることが見受けられる。

V. 要 約

大学生を対象に「10分間泳測定」による持続泳能力を問う運動の経験的記述によって抽出された感性用語を集積し分析を試みた結果、以下のように要約できよう。

1) 感性用語を心理的・技術的・体力的要因の3要因に分類した結果、心理的および技術的要因に関わる記述が多く、男女ともに共通した傾向を示した。

特に、心理的要因に関する記述が多く、体力的要因については極端に少なかった。体力要因については、用語を詳細に分類することが、学習者に知識を理解させる上で必要であると示唆された。

2) 男女ともに2回目測定時の記述量は有意に高く、心理的および技術的要因にのみ、この傾向はみられた。このことから、身体知および動感身体知の形成および言語化への可能性を示していると考えられる。

3) 抽出された感性用語の経験的記述をさらにカテゴリーの枠組みで捉えようとした場合、主に「人間学的意味」や「身体・自己認識」、「決断」および「自己確認」への属性が確認でき、運動経験の教育的意義を反映する結果を得た。

4) 感性用語のほとんどは、運動意識が対象化されたものに関する記述であり、対象として捉えることのできない深化させた記述、すなわち暗黙知の次元での記述については得

Ⅵ. 引用・参考文献

- 1) 大山康彦 他 (2005)：大学生の水泳運動能力の向上に関する一考察～10分間泳測定からの分析～. 茨城キリスト教大学紀要, 31： 217-229.
- 2) 金子和正 (2006)：スノーボード指導における感性用語の出現について. 日本スキー学や会第16回大会号レジメ： 38-39.
- 3) 金子和正 (2005)：スノーボード学習における用語の獲得について. 日本スキー学会第15回大会号レジメ：42-43.
- 4) 岡端 隆 (1994)：運動指導における言語表現の問題と可能性. 体育の科学, 杏林書院, Vol.44, 3：207-210.
- 5) 金子明友 (2005)：身体知の形成 (上), 明和出版：205-212.
- 6) 跡見順子 (2008)：関東支部が行ってきた21世紀の大学体育における人間教育. 大学体育第91号：45-47.
- 7) 矢野智司 (1998)：非知の体験としての身体運動？生成の教育人間学からの試論？. 体育の科学, 杏林書院, Vol.48, 10：785-789.
- 8) 井上誠治 (1998)：スポーツ経験の記述の方法. 体育の科学, 杏林書院, Vol.48, 10：802-806.
- 9) 椿本昇三、広川俊男、島田聡 (2005)：平成17年度学校体育指導者中央講習会 指導要領. 独立行政法人教員研修センター, 27-36.
- 10) 文部科学省学校体育実技指導資料第4集水泳指導の手引 (二訂版) (2004)：大阪書籍, 4-39.
- 11) 小学校学習指導要領 (2008)：文部科学省, 13-18.

An appearance for sensibility term in endurance swimming ~ an inquire about the language expression of exercise~

Yasuhiko Ohyama Shozo Tsubakimoto* Sumitada Sukigara Mayumi Saitoh*

In physical education classes 10 minute swimming tests for students aim at measurement of swimming endurance ability, but this study focuses on the students' expressions and experiential descriptions of that test. We called these expressions "sensibility terms" and collected and analyzed them.

Data from the 543 students of the primary education department were analyzed and 3 factors were detected: mental factors, technical factors, and the factors of endurance and overall physical fitness.

The results are summarized as follows:

1. Analysis of the terms used in descriptions of the experience showed stress on the mental and technical factors. The mental factor was the one most mentioned, and the overall physical fitness factor was least expressed.
2. The swimming test was given twice, and the volume of expressions used for the 2nd measurement was more than the 1st measurement, with no difference between male and female. This indicates the development of abilities to use language to express the experience.
3. At first the sensibility terms were classified into 10 categories for analysis. Four factors (meaning of being human, recognitions of self as a body, individual will/resolution, and self-identity) were considered.
4. After lengthy consideration it was clear that students were expressing their somatic experience in fairly general and simple terms.

* University of Tsukuba, Institute of Health and Sports Science